注　0-1

(1)　ワインは用途の多様性と古典医学や聖書に基づく正統性という点で、アルコールのそれを遥かに凌駕していた[蔵持 1988: 189]。

(2)　それに私はいつも、マルコ・ポーロはあらゆるものについて語り、おそらくあらゆる場所に行っていたであろうに、なぜ『東方見聞録』のなかで万里の長城や中国人がお茶を飲んでいたという事実について何も触れていないのだろうと不思議に思っていた[セロー 1988: 146]。

(3)　きちんとした人物の邸を訪ねる者に対してはそれがひとりであれ複数であれ、華麗な盆の上に載せた一個あるいは人数分の陶器にチャ(茶)と呼ばれる生ぬるい湯を淹れて出すのが彼らの習慣である。この湯はやや赤みがかってたいそう薬効があり、彼らはこれを常飲する。この湯は複数の野草を煎じたものからできるもので、やや苦味がある。知人であると否とを問わず多少とも尊重すべきあらゆる人々は、ふつうこのチャでもってもてなす。私もたびたびこれをご馳走になった[ダ・クルス 2002: 171-172]。

(4)　中国から買う物についていえば、わが国の絹製品にとって不可欠の材料である中国の生糸ばかりでなく、もう一つの不可欠の贅沢品、というよりは絶対欠くことのできない生活必需品たる茶をも輸入できなくなるであろう。----<中略>------以上のようなさまざまの災いが、中国と不仲になると必ず起こらざるをえないように思われる[マッカートニー: 220]。

(5)　たった今、私の主席大臣[和珅]に宛てた書面の翻訳を受け取った。これは、マキントシュ船長がヒンドスタン号に積んで来たすべての礼物の引渡しを無事に終え、皇帝にも敬意を表したので、舟山に停泊中の同船の指揮を再び執るために直ちに赴くことを許されたい、また彼の配下の事務長が茶、ないしは同港および近くで調達できるような産物を積荷として買い入れることを許されたい、さらにまた、高級船員が私貿易[船長や高級船員が東インド会社から許可書をもらって行う貿易]のための商品を携えている場合には、それを処分することを許されたい、ということを要請したものである[マッカートニー: 117]。

(6)　これらの品はあまりにも豊富すぎて、われわれの必要度をはるかに越えていたので、半分以上の受領を拒まざるをえなかった。ここにリストを挿入する。-牛二十頭、羊百二十頭、豚百二十匹、にわとり百羽、鴨百羽、小麦粉百六十袋、米百六十袋、満州パン

[?]Tartar bread 十四箱、茶十箱、小さい米十箱、赤い米十箱、白い米十箱、獣脂蝋燭十箱、西瓜千箱、マスク・メロン三千箱、干した桃二十二箱、果物の砂糖漬二十二箱、他の果物二十二箱、冬瓜[?]large cucumbers 四十籠、南瓜[?]squash cucumbers 千個、野菜四十束、莢に入った豌豆二十枡、陶器三籠[マッカートニー1793-1794: 18]。

(7)　ここで私は今度の旅行で我々に対して示されている心遣いのほどをはっきりと立証する事柄を一つ、是非述べないでおくわけにはいかない。中国人がおよそ食物としてミルクを使うことは滅多にない(ミルクはすべて子牛を養うために当てられている)。しかし、われわれにはミルクをとる習慣があり、それが手に入る時は必ず茶に混ぜるのを見て、彼らはわれわれの旅行中この食料品が欠けることのないように手配した。というのは、特に用意した舟に牝牛二匹を載せて同行させ、われわれが終始ミルクの供給を受けられるようにしたのである。これはイギリス人旅行者にとってはまことにありがたい準備である。我々に対する中国政府の仕打ちに見られる矛盾撞着を、どういう風に調和させて考えるべきなのであろうか[マッカートニー1793-1794: 148]。

(8)　茶は淡水より福州及び厦門に運輸しそれより香港に到りついに香港より大英及びアフリカへ輸出す。時としては厦門もしくは福州より直ちに大英もしくは合衆国へ輸出するあり。またふたたび淡水よりニューヨークへ送りたるあり[ル・ジャンドル 19 世紀: 213]。

(9)　成から型通り葉巻と苦い茶をふるまわれたのち、わたしたちは法廷へ赴いた[クライトナー 1992: 159]。

(10)　日本で茶が飲用されるようになったのは九世紀のことで、伝教大師という仏僧によって中国からもたらされた。中国における茶の飲用は、紀元前 150 年、武帝の家臣である司馬相如によって考案された。茶は、おおざっぱに分類すると、つくり方の差異によって、緑茶、紅茶、磚茶の 3 種類となる。茶摘みは年に 3-4 回行われる。茶の葉を天日で乾かし、釜で炒り、揉むと、緑茶ができる。緑茶は日本や中国では国中どこでも砂糖抜きで飲み、中国では大規模な商業活動の中でも中心的な位置を占める商品となっている。この緑茶を一度炒ってから軽く醗酵させ、それから銅版の上で炒る。これがいわゆる紅茶であり、ほとんどが輸出用である。

　最初に摘んだ葉からいちばん上等な茶ができる。これを一番茶という。海上輸送しても品質が落ちないことから一般に最高級品と目されているキャラバン茶は、そもそもヨーロッパにはまったくない。なぜなら、キャラバン茶とみなされているロシアの茶でさえも、最初の茶摘みの後、揚子江河畔の漢口から船で上海へ、引き続いて天津、北京へ

と海上輸送し、ここから再び海上を逆戻りして、モンゴル、シベリアを経てヨーロッパへもたらされるのである。茶の粉末を圧縮すると、いわゆる磚茶となり、モンゴルやチベットでは小銭代わりに使われる[クライトナー 1992: 220-221]。

(11) 砂糖もミルクも入れずに飲まなければならなかった。というのも、シナ人はミルクとか砂糖というようなヨーロッパ風の贅沢品は使わないので、それらを手に入れることができないのである[シュリーマン 1991: 22]。

(12) どのベンチも健啖家とおぼしき観客でいっぱいだった。というのも、どの机にも強い酒[白酒]を満たしたトランペット型の杯、ティーポット、パン、各種のジャム、西瓜の種、葡萄の房、野菜、飯、林檎、梨、パイプ、煙草、それに例の銭をくくった大きな輪でいっぱいだった。この鉛と亜鉛の小銭は、繰り返しになるが、汚いのとの重いのとで、ポケットには入れない。手持ち不沙汰な人は一人もいない。誰もが食べるか飲むか煙草を吸うかしていた。すべて男性である。というのも、まともな女性が芝居に行くなど、慎みのないこととされているからである[シュリーマン 1991: 35-36]。

(13)火をおこすための炭火と、お茶が沸くまでの差し当たっての一杯の熱いお茶をくれるためだった。チベットでは、野宿している近くに旅人が来ると、普通の礼儀としてそうする[ダヴィッド=ネール 1927: 51]。

バター入りの塩味のチベット茶は飲物というよりむしろスープであり、疲れきって凍えている旅行者にはおいしい気付け薬でもあった[ダヴィッド=ネール 1927: 193]。

チベット人の食事は、お茶で始まり、スープで終わる[ダヴィッド=ネール 1999 前掲書: 235]。

(14) 私が自分のコンパートメントを探して入っていくと、高官が坐ってお茶を淹れていた。筋金入りのこの保守派は小さなジャムの瓶を持ち歩いていた。同じ葉を何度も使い、出がらしの葉で瓶がほぼ満杯になると、ようやく葉を入れ替えた。私は、中国の鉄道が無料で提供している緑茶の葉(この男は知っているのだろうか?)を一つまみカップに入れ、やはり無料の熱いお湯を魔法瓶から注いだ[セロー 1988: 175]。

中国の列車にはあきれることがあった。十二ヵ月の中国旅行のあいだに四十本の列車に乗ったが、まともなトイレには一度としてお目にかかったことがない。スピーカーは一日十八時間ガーガーピーピー鳴っている――毛沢東主義のお題目をがなっていた時代

の名残りだ。暴君のような車掌に出くわすこともあるし、食堂車の食事時の喧騒をみるとわざわざ足を運ぶ気にもならなくなる。けれども、そんな不愉快さが帳消しになることもあった。親切な車掌に出会ったり、たまにうまい料理が出てきたり、寝台が快適だったり、クジにあたったり……。そしてすべてがうまく行かないときでも、お茶を飲むための熱い湯の入った魔法瓶はかならず用意されていた[セロー 1988: 211]。

注　1-1

(1)　以下、『茶経』巻 1 から巻 10 までの各巻のなかから、巻 1-6 の茶の起源・道具・製造法・茶器・茶のたてかた・茶の飲み方を、原文をあげ著者が解釈した。 原文の中で表記できない文字は〇(偏は--、旁は---)のように記述した。

茶者南方之嘉木也一尺二尺廼至数十尺其巴山峡川有人両人合抱者伐而掇[陸羽 758: 巻上一之源 1 丁左]

茶は中国の南部にはえる良い樹木であり、高さは 1-2 尺から数十尺にいたる物まであり、陝西省や四川のほうには人がふたかかえするほど太いものもあり、そのような木は枝を切って葉を摘む。

唐代の 1 尺は、31.1cm である[于 1990: 526]。

籯一曰籃二曰籠一曰筥以竹織之受五升或一豆斗(偏は豆、旁は斗)二豆斗者茶人負以採茶也[陸羽 758: 巻上二之源 2 丁右]

茶摘みのための籯(かご)が籃・筥など各種あり、竹で編んであり、5 升から 1 -3 斗はいる。茶摘みをする者は、これを背負って茶摘みをする。

つづけて、竈(かまど)、甑(せいろう)、杵臼(うすときね)、規(茶を固める型)、承(茶の受け台)、檐(茶の受け台の上におく布)、芘莉(竹で編んだ茶を乾かす台)、棨（固めて乾した茶に穴を開けるきり)、撲(固めた茶の穴に通して解きほぐすもの)、焙(茶をあぶるかまど貫(固めた茶の穴に通してあぶる)、棚(あぶった茶を乾かす木の棚)、穿(竹を割ってつくったもので、固めた茶の穴に通して、昔の銭の穴のように紐で通す)、育(完成した茶の保存庫)が記述されている。
茶の製造方法順に道具が列挙されており、唐代、茶をつんで型に入れて乾かし、火であぶって乾燥させ、穴に紐を通して保存するまでの茶の製造過程が明瞭である
ちなみに、唐代の 1 升は、594.4m l である[于 1990: 526]。

凡採茶在二月三月四月之間茶之筍者生爛石沃土長四五寸若薇蕨始抽凌露採焉茶之芽者發於聚薄之上有三枝四枝五枝者選其中枝頸拔者採焉其日有雨不採晴有雲不採晴採之蒸之〇(偏は手、旁は寿)拍之焙之穿之封之茶之乾矣茶有千萬状[陸羽 758: 巻上三之源 4 丁右-左]

茶摘みは２月から４月(旧暦)の間におこない、筍のような茶は爛石沃土にはえ、長さは 4-5 寸であり、まるで薇(豆科の植物)や蕨が初めて芽を出したときのごとくであり、朝露が出ているときにつむ。茶の目は葉が集っている上に 3 つの枝 4 つの枝 5 つの枝とでているが、そのなかで良いものを選んで摘む。もし茶を積む日に雨が降っていれば摘まず、雲があれば摘まず、晴れた日に摘み、蒸し、杵や臼でつき、受け台の上で叩き、焙って、穴に竹の紐を通し、保存庫に乾かして保存する。茶にはいろいろな状態のものがある。

唐代の１寸は、3.11cm である[于 1990: 526]。
第４巻では、以下の茶器の名をあげ、説明している。ここでは、茶器の名のみ抜粋した。

風爐　灰承　筥　炭〇(偏は木、旁は過)　火筴　〇(偏は金、旁は復)　交床　筴　紙囊　碾　羅合　則　水方　漉水囊　瓢　竹筴　〇(偏は齒、旁は差)筥　掲　熟盂　盌　畚　札　滌方　具列　都籃[陸羽 758: 巻中四之源 6 丁右-12 丁左]

風炉　灰承(かいしょう)(灰受け)　筥(きょ)(炭取り)　炭〇(たんた)(偏は木、旁は過)(炭割り)　火箸　〇(ふ)(偏は金、旁は復)(かま)　釜敷き　茶はさみ　紙袋　薬研　篩と茶入れ　茶杓　水指し　水こし　柄杓　竹箸　塩入れ　塩匙　湯冷まし　茶碗　茶碗いれ　たわし　水こぼし　茶滓入れ　茶だな　茶器籠

凡炙茶慎勿於風燼間炙[陸羽 758: 巻下五之源 13 丁右]。

茶を炙るときは慎重に行い、風がひどく火の勢いが激しくなる時に炙ってはいけない。

翼而飛毛而走呿而言此三者俱生於天地間飲啄以活飲之時義遠矣哉至若救渇飲之以漿〇(偏は益、旁は蜀)憂〇(上は芬、下は心)飲以酒湯昏寝飲之茶[陸羽 758: 巻下六之源 15 丁右]。

翼があるものは飛び、毛がはえているものは歩き、人は言葉を話す。この三者はすべてこの世界で飲んだり食べたりすることによって生きている。このように飲むということの意義は、大変に深遠である。もし喉の渇きを止めるには水を飲み、憂いや怒りを忘れるためには酒を飲み、眠気をとるためには茶を飲む。

(2)「cha」: 広東語に由来する、広東から陸路により北京、朝鮮、日本、モンゴル、

モンゴルからロシアへ、広東から西へはチベット、ベンガル、ヒンディー

「te」: 福建語に由来する、福建省のアモイからオランダへ、西欧全体へ[橋本実 1981: 20-22]

(3) 癸亥(二二)、幸近江國滋賀韓埼、便過崇福寺、大僧都永忠、護命法師等、率衆僧奉迎門外、皇帝降輿、升堂禮佛、更過梵釋寺、停輿賦詩、皇太弟(淳和)及群臣奉和者衆、大僧都永忠手自煎茶奉御、施御被、即御船泛湖、國司奏風俗歌舞、五位以上并掾以下賜衣被、史生以下郡司以上賜綿有差「[藤原冬嗣(775-826)841: 巻 24 嵯峨天皇弘仁 6 年 3 月]。

弘仁 6 年(815)年 3 月癸亥(22 日)、嵯峨天皇は近江の国韓埼(からさき)に御幸された。そして崇福寺に至ると、大僧都永忠・護命法師などが大勢の僧侶を従えて門外までお出迎えした。天皇は輿を降り、堂にあがって仏を拝んだ。その後梵釋寺に到着されると、輿を止めて漢詩をおよみになり、皇太弟(後の淳和天皇)と群臣などが大勢で、天皇にあわせて漢詩を奏した。大僧都永忠は自分で茶を点てて天皇に献上し、天皇は衣装を与えた。その後御船を湖に浮かべ、国司が土地の歌や踊りを披露した。天皇から五位以上と掾以下には衣装を賜り、史生以下郡司以上には綿を賜るなど、位階によって下賜品が異なった。

注　1-2

(1) 「緑茶」: 不醗酵茶。中国では「釜煎り茶」、日本では「蒸し茶」中心。

中国でも最も生産量が多く、普及度が一番高い。龍井茶など。

「黄茶」: 弱後醗酵茶。葉の形の美しさを楽しむ。君山銀針など。

「黒茶」: 後醗酵茶。プーアール茶もこれに属する。かび臭く、固形茶が多い。

「青茶」: 半醗酵茶。烏龍茶もこれに属する。安渓鉄観音など。

「白茶」: 弱醗酵茶。福建省で主に製造され、贅沢で貴重な茶。例、白毫銀針。

「紅茶」: 全醗酵茶。紅茶のこと、紅茶も中国から西欧に普及した。祁門(キーモン)紅茶など[陸松侯 2000: 84]。

注　2

(1)　浙江の竜井茶は、民間の伝説によると杭州の獅子峰山に一等の青い竜がいたが、ある日突然岩がさけて、竜が飛びあってしまい、あとにのこった穴から非常においしい泉がわき出た。また、周囲には名茶がはえるようになった[蔡 2000: 111]。

竜井茶については、他にも北宋の時代に天竺から渡来した「白雲茶」がもとであるとか、杭州市を囲む葛嶺宝山の「宝山茶」がもとであるという伝承など、さまざまに伝えられている[阮 2003b: 私信]。

現在「竜井茶摘み歌」なども存在し、西湖竜井茶節などの収穫祭もおこなわれている。

注　3-1

(1)　茶の効能は、茶は心臓によく、本草学では茶は万病の元である消化不良をなくすと、茶は意力を増す[栄西 1211a:2 丁右-9 丁右]、[栄西 1211b:89-100]、[栄西 1211c:47-57]。

(2)　肉食を常食とするため、消化促進剤として茶を貴重としたとの記述がある[脱脱 1345: 3969]。

(3)　田を耕すものは、わずかに 20-30%にすぎず、また田を耕して国庫に入る税金は、50-60%にも満たない[和田 1960: (1)32-36]。

宋代初期の人口の公式記録として、『宋史』地理志の原文を以下引用する。

　宋太祖受周禅、初有百十一、縣六百八十三、戸九十六萬七千三百五十三。
建隆四年、取荊南、得州、府三、縣一十七、戸一十四萬二千三百、
平湖南、得州一十五、監一、縣六十六、戸九萬七千三百八十八。
乾徳三年、平蜀、得州、府四十六。縣一百九十八、戸五十三萬四千三十九。
開寶四年、平廣南、得州六十、縣二百十四、戸一十七萬二百六十三。
八年、平江南、得州一十九、軍三、縣一百八、戸六十五萬五千六十五。
計其末年、凡有州二百九十七、縣一千八十六、戸三百九萬五百四。
　太宗太平興国三 3 年、陳洪進獻地、得州二、縣一十四、戸十五萬千九百七十八。
銭俶入朝、得州十三、軍一、縣八十六、戸五十五萬六百八十。
四年、平太原、得州十、軍 1、縣 40、戸 3 萬五千二百二十。
七年李繼捧来朝廷、得州四、縣八。
至是、天下既一、彊理幾復漢、唐是舊、其未入職方氏者、唯燕雲十六州而已[脱脱 1345: 2093-95]。

　宋の太祖(927-76)が後周の禅譲を受け皇帝となったとき(960 年)、初め 111 州・638 県であり、戸数は 96 万 7353 であった。
建隆 4 年(963 年)、荊南を占領し、州・府 3 つ、県 17、戸数 14 万 2300 増えた。
湖南を平定し、州 15、監一、県 66、戸 9 万 7388 を得た。
乾徳 3 年(965 年)、蜀を併合して、州・府 46、県 198、戸は 53 万 4039 増加した。
開宝 4 年(971 年)、広南を平定して、州 60、県 214、戸 17 万 263 を得た。
開宝 8 年(975 年)、江南を占領し、州 19、郡 3、県 108、戸 65 万 5065 増加した。
同年、州は 297、県 1086、戸 309 万 504 となった。

太宗(939-97)の太平興国 3 年(978 年)、陳洪進(914-85)が土地を献上したため、宋王朝は州 2 つ、県 14、戸 15 万 1978 を得た。
銭俶(929-88)が朝廷に帰順し、宋王朝は州を 13、郡を 1 つ、県を 86、戸を 55 万 680 得た。
太平興国 4 年(979 年)、太原を平定し、州 10、郡 1、県 40、戸 3 万 5220 獲得した。
太平興国 7 年(982 年)、李継捧(生年不詳-1004)が朝廷に服属し、州 4、県 8 が増加した。
ここに至って、天下は統一され、新疆や大理もまた漢代・唐代のころとほぼ同じ領域になった。この時点で帰順していないのは、燕雲十六州のみである。

(4) 茶の色は白を貴ぶ[蔡 1064: 1 丁右]。

(5) 茶の芽には小芽、中芽、紫芽、白合などがあり、一番上等なのは水芽で次に小葉、中芽と続き、紫芽、白合、鳥帯は用いない[趙 1186: 3 丁左]。

注　3-2

(1)　開元中泰山霊厳寺有降魔師大興禅教学禅務於不寐又不夕食皆許其飲茶人自懐挾杖到處煮飲従此轉相倣遂成風俗自鄒齊滄棣漸至京邑城市多開店舗煎茶賣此不問道俗投銭取飲其茶[封演(生没年不詳)　742-805 年前後: 四庫全書子部雑家類巻 6,1 丁右-左]。

開元年間（713-741）に、泰山（山東省済南市の南にある中国五岳の一）の霊厳寺（北魏以来の有名寺院）に、降魔師という禅僧がおり、座禅のときは睡らせないし、夕食もとらせなかった。しかし飲茶だけは許した。そこから発展して、一般の人も茶を持ち歩くようになり、至るところで飲まれ、これが広がって、ついに風俗となった。そして今の山東省から河北省方面に伝播し、長安にも達した。多くの城市には茶店ができ、茶を煎じて売るようになり、道人・俗人を問わず、銭を出して飲むようになった[布目 1995: 109]。

(2)呉自牧の『夢粱録』の「茶肆」の条に、南宋の首都杭州の茶肆の描写が

今杭城茶肆亦如之、挿四時花、挂名人画、装点店面[呉 1147: 62]。

今杭州の茶店は、四季の花を飾り、名人の画をかけ、店を飾っている。

呉自牧は南宋末の杭州銭塘出身とあるだけで、伝記は不明である。呉自牧の記述によると、当時の茶館は次のように分類できる。

「茶楼」: 裕福な家の子弟・非番の役人らが楽器や歌曲の練習などをするたまり場。
「人情茶坊」（人情茶肆）: 本来は茶を飲ませるのが商売ではないが、茶を出す。
「市頭」: もっぱら娼妓が集まる茶肆、職人たちが仕事を求めて集まる茶肆。
「花茶坊」: 娼家、妓女を抱えて妓女遊びをさせる茶肆。

(3)　茶坊は五更（午前 4 時）になると灯をともし、衣類・書画・花環・領抹といった品物の取引売買が行われ、夜明けになると引き払う[孟 1147: 70]。

(4)　たてた茶の色が白いのを絶佳とする[蔡 1064:上編、3 丁右]。

(5)　茶碾は、銀、または鉄でつくる[蔡 1064:下編、4 丁右]。

最も適した薬研は銀製、次は鍛鉄であり、鋳物製は茶の色を悪くする[趙 1107:説郛本 4 丁左]。

(6) 福建の建安で銘茶がつぎつぎと生産され、当時文人から一般人までみなが飲茶を楽しむようになった結果、茶の選別の仕方も加工法、闘茶、茶芸すべて最高水準に到達した[趙 11071 丁右-左]。

(7) 皆が自分の持っている茶の優劣を、闘茶によって競う状況が発生した結果、どんなに風流とは無縁の人物でも、自分が茶を持っていないと恥とするようになった[趙 1107: 1 丁左-2 丁右]。

注　3-3

(1)　先行研究では、古代以来の飲茶を題材にとった造形表現を以下のように時代順に列挙している。

後漢　湖南長沙の馬王推「敬茶仕女帛画」
唐代　新疆トルファン「対棋図」
　　閻立本(生年不詳-673)「蕭翼賺蘭亭図」
　　周昉(生没年不詳)「調琴啜茗図巻」
　　佚名「宮楽図」
北宋　徽宗皇帝趙佶『大観茶論』「文会図」
　　銭選(1239-1302)「盧仝烹茶図」
南宋　劉松年「手輦茶図」
遼　　河北宣化下八里村の遼墓壁画
元代　趙孟頫(1254-1322)「闘茶図」
　　趙原(生没年不詳)「陸羽闘茶図」
明代　文徴明(1470-1559)「恵山茶会図」・「品茶図」・「林榭煎茶図」
　　仇英(1494 前後-1561)「松亭誠泉図」
　　唐寅(1470-1533)「事茗図」「陸羽烹茶図」
　　丁雲鵬(1547-1628)「玉川煮茶図」
　　陳洪綬(1598-1652)「停琴啜茗図」
清代　汪士慎(1686-1759)「煎茶図」
　　金廷標(生没年不詳)「品泉図」　[董 2002: 204-214]

(2) なぜなら元来燕雲十六州は、現在の河北、山西北部一帯にあたるが、契丹族の草原文化と中原の漢族の文化成分の混合地帯であった。現在の北京、大同、河北、宣化に漢族の官僚、富裕層の墓地が多く見られ、壁画には家中の宴会、音楽隊の様子などが活写されている。遼代後期の漢族の墓室は、北京、大同、宣化などに多い[楚 2002: 168-174]。

(3)　埋葬年代は、おおよそ 1093 年(張匡正墓)から 1117 年(張世古墓)までとみられるが、被葬者の一覧である。

1 号墓：張世卿
2 号墓：張共誘
3 号墓：張世本
4 号墓：墓誌盗難により不明

6 号墓：墓誌盗難により不明

7 号墓：張文藻

8 号墓：未完成の空墓

9 号墓：墓誌盗難により不明張世卿

10 号墓：張匡世　[河北省文物研究所 2000: 103-126]

(4)　1 号墓の張世卿の墓室は、地下 1.3 mの墓道、天井、墓門、前室、甬道、後室という構成である。墓室内部は南北に全長 6.8m、東西の幅は 3.1m、高さは 4.4mである。

墓道:天井は南に広く 2.7m、水平の長さは 9.2m、地上から深さ 5.3mに達しており、下にくだる幅 1mの階段が 9mある。全体に灰褐色の土で覆われている。

天井：墓門の前にあり、東西に 3.2m、南に向かって 1.03m伸びている。

墓室-　前室：南北に 2.55m、東西に 2.2mである。

甬道：前室と後室を連結する通路で、高さは 1.6m 、幅 1.13m 、深さ 0.81mである。

後室：正方形に近く、縦は 3.1m、幅は 2m、高さ 4.4mである。

張世卿墓の壁画は、前室は東西南北に 1 枚ずつ 4 枚、後室は 5 枚合計 9 枚の構成になっており、それぞれの壁画の大きさと題材は以下のとおりである。

前室 -南側：横 2.3m、縦 1.7m、杖を持った二人の門番。

東側：横 2.5m、縦 1.72m、音楽隊。

北側：横 2.3m、縦 1.7m

西側：横 2.5m、縦 1.72m、出行図(従者 5 人が主人の外出に従う様子)。

[河北省文物研究所 2001b: 7]

注　4-1

(1) 1886 年　　13 万 4000t
　1896 年　　10 万 t
　1900 年　　8 万 3000t
　1918 年　　2 万 4500t
　1920 年　　4 万 1700t
　1929 年　　5 万 7400t
　1934 年　　4 万 7100t
　1941 年　　8000t
　1947 年　　1 万 600t
　1948 年　　1 万 7500t
　1949年　　7500t[余 1999: 156]

(2)　同時代の中国の茶館は、先行研究によると機能別に以下のように分類される。

一条龍：酒・茶・点心(軽食)を提供する、インテリアも洗練された高級な茶館。茶は花茶(ジャスミン茶など)を蓋碗で飲ませることが多い。

清茶館：茶しかださず、酒は出さない、一般的な茶館。将棋をしたり、暇つぶしをしたり出来るし、語り物や太鼓などの実演もある。

野茶館：屋外の茶館で、木陰の下にテントを張り、テーブルといすを出す。郊外の町村や大きな道路の脇などにある。茶器や茶は普及品であり、客は労働大衆。

茶園・茶楼：劇場の別名であるが、芝居は必ず茶をともなうので、実質的には茶館である[劉 1995: 145-147]。

現代の中国の茶館には、劇場タイプの「茶館」と喫茶店タイプの「茶芸館」があるが、すでに両方に対応するタイプの茶館存在し、性質から下記のように分類することができよう。

(3) 北京のジャーナリストの羅信耀(生没年不明)、1939 年 2 月 26 日から 1940 年 1 月 30 日にかけて、「北京時事日報」という英字紙に 20 世紀前半の北京の風俗を語る記事を出版している。羅信耀は 20 世紀前半の中華民国時代の茶館について

北京の生活は茶館を抜きにしては語れない。茶館もまたあらゆる階層に浸透している[羅 1988: 465]と述べている。

(4)　当時、「茶荘」という茶の量り売りをする茶屋も、北京にみられた。宮尾しげを（1902-82）が見聞記をのこしており、ユーモラスで詳細な北京の風俗の記録集となっている。宮尾しげをは東京都生まれ、岡本一平門下の有名な漫画家で 1922 年児童漫画「漫画太郎」でデヴュー「団子串助漫遊記」で一世を風靡した。作風は大津絵、鳥羽絵など明治以前の漫画の伝統を継承したもので、文楽人形や江戸小ばなし、江戸風俗、川柳にも造詣が深く、太平洋戦争から戦後にかけては「江戸小噺集」など多数の著書を出し、民俗芸能研究家としても著名であった[柳本 1980: 239-240]。宮尾しげをは「茶荘」について、

> 目方売の外に包売というのもやっている。一包日本の二銭、一銭、五厘に相当する額で売るのだ

と指摘している[宮尾 1939: 72-73]。

(5)　西園寺公一（1906-93）は西園寺公望の孫で、1958 年から 12 年間一家で北京に滞在し平和運動に力を注いだ。『中国グルメ紀行』中に、以下の記述がある。

> 北京でいちばん普通なのは、「清茶館（チンチャーグワン）」である。物識り博士の李先生が、「清茶館」の特長をズバリと一言で表現していわく――只売茶（ジーマイチャ）。読んで字のごとく、茶だけを売るうちである。茶のほかにはなにも売らない。これが北京風である。
>
> 上海や広州の茶館では、落花生や瓜子児（グワズル）（ウリ類のタネ）のようなつまみものや、点心、くだもの、たばこなども売っているが、北京式は、茶館はお茶だけで、つまみものや、たばこがほしければ、外からくる売子から買うことになっている。
>
> 解放後は、有閑階級は姿を消し失業者も少なくなったので、茶館で暇をつぶす人が少なくなり、いきおい茶館の数もへったようだ。しかし、王府井の東安市場のなかの茶館などは、いつみても満員の盛況である。北京郊外の工場や、近くの農村から買いものにでかけてきた人びとが、お茶をもとめて、休んだり、弁当をつかったりするのに便利だからだろう。
>
> 清茶館のように清くなくて、お茶となまぐさ料理の二股をかけている茶店を「弐葷舗（アルフンプー）」という。食事の時間には食事を、その合間にはお茶を売ろうというぬけめのない商法である。しかし、弐葷舗に料理のうまいものはほとんどなく、たいがいはすきっ腹をみたすだけの料理でお茶をにごすということらしい。
>
> 茶館には、娯楽を主とし、茶を従とするようにみえるものもある。「棋館（チーグワン）」や、「書茶館（チャーグワン）」などがそれである。その名のとおり、お茶を飲みながら、碁盤を囲み、将棋を指すのが棋館で、いつだったか魚釣りの場所を偵察するため陶然亭（タオランテイン）公園へいってみたら、小高い丘の上に、棋館ができていた。
>
> 書茶館はというと、お茶を飲み、ものを書くところ、ではない。お茶を飲みながら、

「評書（ピンシュー）」や、「説書（シュオシュー）」――つまり講談をきく席である。語り手は、竹の笞のようなもので卓を叩きながら、『三国志』、『水滸伝』のような軍記、武談、あるいは『紅楼夢』、『西廂記』のような世話もの、艶ものを読む。

北京で、昔からの大衆の娯楽地区として知られている天橋（テイエンチャオ）には、いまもこのような茶館がある。店の奥の正面に、ちょっと高くなった、小さい演壇ができている。茶代のほかに、読みものが気に入った客は、いくらかの聴き料を出すしくみである。

まえには、「野茶館（イエチャーグワン）」というのがあったそうで、またの名を「雨来散（ユイライサン）」といった。野遊びや、魚釣りの人びとを客として、野外で茶を売るのだから、名は茶館でも、じつは館はないのだ。だから、俗称どおり雨来散である。雨がくれば、そそくさと店じまいだ。客も、主人も一目散に逃げ出すのである。雨来散とはまことにしゃれた名をつけたものだ[西園寺 1985: 179-183]。

注　4-2

(1)　「茶芸」は、単なるお茶の淹れ方や作法ではなく、“喫茶を通じて自然界と一体となり心を開放し、中華四千年の伝統文化に触れ、先人の美意識を生活の中に取り入れよう”という、文化と生活の提案である[平野 1999: 161-162] 。

(2) 「茶芸」勃興期の 1980 年代初頭の台北における「茶芸館」の喫茶事情について、以下のような記述がある。

二、三年のうちに、急に町のあちらこちらで増えはじめた。
店には工夫茶器によるウーロン茶の正しい淹れ方を指導する人がいて、はじめてのお客には懇切丁寧に教えてくれる。常連客やお茶通は適当にお茶を選び、自らお湯をわかして自分の好きなようにお茶を淹れ、喫茶を楽しむ。店や選んだお茶の種類によって多少の高低はあるものの、ふつうの喫茶店に比べてずいぶん高い。洒落た店で、お茶を飲ませるだけではもったいないと思うような店も少なくない[谷本 1993: 173-178]。

(3)　茶芸館は従来の茶館と異なる。経営者は大衆に茶文化を広める意識を持つべきであるし、茶文化普及をはからなければいけない[陳 1999: 前言]。

実のところ、現在のように全国各地に茶芸館が普及したのは、20 世紀の 80 年代末に「台湾風」が吹いてからである。1970 年代前半に台湾は改革解放の新経済政策を実行し、経済の急速な発展をなしとげていた。改革解放の影響で西側の流行が台湾に入り、欧米の流行が市場を席巻し、コーヒー、コーラを飲むことが流行となり、伝統的な茶飲料は若い人に見放され、茶業の打撃はきわめて大であった。同時に生活が豊かになるにつれて、人々の民族的自尊心は日増しに高まり、ルーツを求めて中国文化の復興を求める声も徐々に高まり、知識人は中国文化を求め始めた。彼らの音頭とりで、切り絵、凧、中国画、中国音楽、中国劇、カンフーなどが民間に普及し、深く高尚で優雅な文化が新しい流行となった。以上のようなブームの中で、民族文化と現代文化が結合したのが茶芸なのである[陳琿 2000: 310]。

「茶芸」は、いわば中国文化から発祥した茶道が日本で普及し、それを 1970 年代末に台湾で取り入れ発展させたものである。「茶芸」が台湾から、中国大陸へ日本へとまた逆に普及していったことになる。「茶芸」振興運動はいわば東アジア全体を巻き込んだ文化運動といえようが、背景には各国の生活水準の上昇があると思われる[陳 1999: 前言]。

(4)「国茶出路的思考」で、蔡泉宝は以下のように指摘している。

中国(台湾を含まない)の 19 の省市で茶を産出する。1978 年から 1983 年にかけての平均生産量は 53 万 200t であり、1988 年は 54 万 5400t で前年より 16.6%上昇した。1988 年は茶を粗製乱造し、23 万 t も国家の倉庫に残ってしまった。1989 年は 53 万 5000t で、同年度の茶による国家収入は 1988 年より 15.7%減少したが、茶の売れ残りは少なくなった。1990 年は 52 万 t で、前年度より 3.7%減少したが、1988 年度の古茶がまだ国家の茶葉倉庫に残っていたために、輸出量自体もまた 6.9%と減少した。1991 年は 54 万 t、1992 年は 55 万 9000t、1993 年は 60 万 t で、茶の売れ残りも前年よりも 25%も増えてしまった。1994 年は 52 万 7000t、1995 年は 51 万 t 前後であった。1988 年から 1995 年の輸出状況は、1988 年は 19 万 5471 万 t、1989 年は 20 万 4584t、1990 年は 19 万 5471t、1991 年は 18 万 4872t、1992 年は 17 万 6359t、1993 年は 20 万 1430t、1994 年と 1995 年の輸出量は、生産量の三分の一前後であった[蔡 2000: 44-46]。

(5) 1996 年 2 月　杭州青少年茶芸、青少年対象、小中学生。
1996 年 6 月　杭州児童茶芸隊
1997 年 1 月　杭州小茶人茶館
1996-1997　中日西湖茶会[王 2000: 557]。

茶芸の動向は、年表にすると以下のようになる。

1977 年　台湾で茶芸館、台北市、高雄ではじまる。
1982 年 4 月　商業部杭州茶葉加工研究所が杭州に設立された。
1982 年 8 月浙江農業大学教授の庄晩芳が茶の民間団体である茶人の家を設立、茶文化の高揚、学術交流の発展、茶葉販売の促進、茶を通じての交流、飲茶の風習に新風を吹き込み、中国茶葉サービスの発展、茶文化を宣伝するために季刊雑誌「茶人の家」をつくった。同誌は 1993 年に「茶博覧」に改名された。
1983 年 2 月：台湾で「中国茶芸」が発行された。
1991 年 4 月：中国茶葉博物館の開幕式がおこなわれた。1500 平方メートルの敷地に 6 つの展示会場がある。
1991 年 6 月：雑誌「農業考古」が「中国茶文化専号」を発刊、(茶文化の学術雑誌)
1991 年 7 月：中国茶業学会が学術団体に昇格。
1991 年 8 月：中日文化交流 800 年
1992 年 6 月：浙江農業大学で茶学の博士号を授与。
1992 年 7 月：「中華茶人」が創刊された。

1999 年 1 月 :『中国茶葉出口統計』発行。

1999 年 4 月 : 茶人の家基金会を、北京にて開催、同時期 1977 年に開始した台湾の茶芸館は、90 年代末には台湾の茶芸館は 1000 軒以上にのぼった[中国茶葉股份有限公司 2001: 269-367]。

(6) 先行研究は、他にも茶芸の活発化に関して以下のような指摘がある。

杭州国際茶文化研究会は、1990 年 10 月に、浙江省対外文化交流協会、中国茶葉学会、浙江省茶葉協会などの協力によりひらかれた。

国際茶文化の発表会を、毎年 1 度、中国・日本・韓国・台湾・香港などで行われている。

浙江国際茶人之家は、中国文化の発展と普及、中華茶芸の振興を目的とし、1982 年に成立した。1985 年、浙江省茶葉公司の資金援助を受けて、西湖湖畔に建設された。1988 年に基金会を行い、1990 年 10 月に成立会を行った[孔 1993: 169-171]。

1993 年、陸羽の第 2 の故郷湖州で、陸羽生誕 1260 年の記念活動が、浙江省国際文化交流協会、湖州陸羽茶文化が共同で行われ、日本・韓国の茶道の家元の率いる代表団と茶芸の表演、茶器の展示などの交流を行った[蔡 2000: 1]。

4-3　注

(1)　蓋付きの茶碗で、講釈師の話を聞きながら、カボチャの種子などをつまみに楽しんでいる人たちも多い[松下 1988: 122]。

(2)　旧式の茶館と比べて、茶芸館は現代人、とりわけ新しいもの、流行のものが好きな若者たちに受け入れていることは間違いない。彼らは茶を賞味したり茶芸を楽しむために茶芸館に行くのではない。ある者は商売に忙しい社長たちであり彼らは茶芸館の常連客である。静かな茶芸館ではゆっくりと商談ができるのである。高級な茶芸館にはしばしば外国の観光客が訪れ、かれらは茶芸館に行き中国文化を享受し、鑑賞し、考察するのである。以上のような理由から、全国大小の都市で茶芸館繁栄している[齊藤 1998: 310]。

建築の開放性と閉鎖性に関して、以下のように指摘されている。

建築は開放と閉鎖の 2 方向が観察された。開放の例としては、店板(店の正面部分を覆う雨戸状の板)を全部はずして、面している街路と一体化した旧式茶館が 22 軒あった。公園内及びその周辺では、露天部分を広くとった茶館が 10 軒見られた。長廊部分で屋根があるだけの茶館もこのタイプに属する。一方、今回の調査では 2 種類の閉鎖方向が発生しているのが確認された。第 1 は対外的な閉鎖、第 2 は内部空間の分割・個別化だ。第 1 については入り口が小さく、非開放的な茶館が全調査の 56%を占めていた。第 2 については、主に茶芸館で席の間に仕切りを設けたり、個室をつくったりしていた。個室のある茶館は 41.5%あった。閉鎖の傾向は茶芸館に共通して見られた。

開放的な茶館は店外の人の流れと接点を持つ。通りかかる友人を呼びとめたり、物売りに声をかけやすい。また、外部から物売りも入りやすい。これによって茶館は他の業務に仕事場を無料ないし廉価で提供することになる。開放的な茶館の構造は、社会の弱者を受け入れやすい。また仕切りのない構造は、共同の空間をつくり、茶客同士の連帯を生み出す。一方閉鎖的な空間は特定の相手との交流に適していて、同行ではない客同士は接触しない。経済発展の遅れた地域に低消費の旧式茶館、進んだ地域に高消費の茶芸館が多い。理由の一つに都市部の地価高騰があると考える[齊藤 1998: 80-81]。

5-1　注

(1)　竜井茶は外国からの客人を接待するのに用いる茶葉であり、必要量が多いのであるが、しかし高級な竜井茶は生産量が少なく、市場の必要量をみたすのが非常に困難であり、生産量と貨幣のバランスをとるのが難しい商品である。

1984 年以前は、高級竜井茶は商業部(部は日本の官庁の省にあたる)を経由して、全国の供給機関に配給され、中級竜井茶は専門の会社が市場の欲求に対応して輸出したり、国内市場に供給した。

竜井茶の特別な需要とは、以下のとおりである。

ひとつには、外交の場面で使われ、そのため建国当初の 1950 年代から各省庁に支給された。1960 年代中期以来、文化大革命の影響により国内に配給するのが困難になり、はじめに上海の輸出会社に分配され包装し、そのあと国内の外務部関係の機関などに配給された。外交の場面で使われる茶は、浙江の西湖竜井茶・雲南の紅茶・福建のジャスミン茶のどれかにきまっていた。

中央の特殊な需要のひとつとして、1960 年代はじめから省や市の専門機関が、あらかじめ省市の接待機関に配給するようになった。

国家の重要公務や外交活動(例えば国家元首の中国来訪などである)などその他の重要な必要性がある時は、はじめに浙江側は北京市の茶葉管理機関(例えば北京市糖業煙草会社・北京市茶葉会社所属の茶葉加工機関)などに竜井茶をおくり、そのあと北京川の食品供給機関(すなわち北京の特別商店など)におくり、そのあとまた国に供給された。

1973 年から、商業部の供給レートによって毎年 2t 前後が全国に配給されるようになった[阮 2003a: (2)78]。

5-2　注

(1)　浙江省には伝統的に有名な茶が数多く存在し、1949 年の中華人民共和国建国直後には銘茶の輸出はしばらくの間停滞していたが、国内市場が盛んになるにつれて、銘茶の需要はまた増えてきた。浙江省特産公司は、何回も銘茶生産の回復発展のためのキャンペーンを行った。はやくも 1957 年には銘茶の伝統的生産技術の再発掘をこころみ、銘茶の美点を維持しながら銘茶を数多く生産できるように努力し始めた。例えば天目青い項 750kg・黄湯 4000kg・雁蕩毛峰 500kg、建徳苞茶 2000kg、鳩坑毛峰 500kg、華頂雲霧 250kg・などに報奨金を出すようにとりはからったため、1966 年には銘茶の生産は復旧し始めた。

1982 年には省の茶葉機関がまたもや銘茶会議をひらき、質量ともにそろった銘茶の生産を欲求した。そのため茶葉会社にはまたもや銘茶(顧渚紫筍・泉岡煇白・東陽東白・天目青頂・径山香茗・金奨恵明)などの 21 品種数量 1944kg あまりがあつまった。1985 年には 1.69t、1990 年には 1.62t が集積されるようになった。

浙江省各地の銘茶の中で、生産地で消費されない量は杭州市に集積され、その余剰分は北京・天津・上海・江蘇・広東・山東・陝西・遼寧・四川・黒竜江などの各省市で販売される。このような銘茶の生産量は少ないのだが、その影響力は大である[阮 2003a:(2)78]。

注　6-1

(1)　杭州市には、浙江大学茶学系・中国茶葉博物館・中国農業科学院茶葉研究所などの茶に関係する組織のほかに、浙江省茶葉学会や中国茶葉学会なども存在する。

浙江省茶葉学会は、1956 年に浙江農業大学茶学科(1998 年以降浙江大学農学部茶学系と改名した)に本部をおいて設立された。同大学や中国茶葉学会、浙江省科学技術協会の後援のもと、浙江の実際的な茶葉科学技術の発展や、茶葉の販売促進運動に深く関わっている。現在季刊誌「茶葉」を刊行している

中国茶葉学会は、全国的な学術団体であり、1964 年に設立したものである。学会員は茶葉の科学技術者・研究者が中心であり、中国科学技術協会の後援を受け、本部は中国農業科学院茶葉研究所に設置されている。1993 年までに浙江・安徽・福建・湖南・雲南・貴州・四川・湖北・広東・広西・江西・江蘇・河南・上海・北京などの 15 の省や都市に、地方支部をもうけた。1995 年に同研究所や中華茶人連合会と共同で「茶-品質-人体健康」を主題とした、インドやスリランカ・日本・韓国など 14 の地域から 150 名の代表を集めた、盛大な国際的な学術討論会を開催した。半年ごとに学術雑誌「茶葉科学」を刊行している。茶人の家も、また杭州市に本部を設置した茶に関する団体である。1980 年に中国政府によってつくられたいわば杭州市郊外にある国営の茶館で、政府の外国要人の接待所をかねており、「茶博覧」の発行に深く関与している。

また、前述した無我茶会も茶に関する大きな活動であり、杭州市においてもしばしば開催される。これについて中国の研究者は以下のように述べている。

> 茶芸活動。20 世紀の 1980 年代初期に台湾から始まった。「無我」とはもともと仏教の用語で、「無私」の意味である[陳 2000: 552]。

中国茶芸と仏教との関連性を示すものとして、注目に値する。

6-2　注

(1)　杭州市も、西湖竜井茶などの中国緑茶以外の茶、例えばジャスミン茶などの生産をこころみたが、結局失敗に終わっている。

杭州市の中国農業科学院茶葉研究所は、新製品の開発に熱心であった。1972 年に杭州の加工所が球状のジャスミン茶を開発し、北京の市場に 1972 年から 1979 年の連続 8 年間に、毎年 10t 前後を供給した。しかし結果は失敗であった。中国国内の消費者は従来の縦長のジャスミン茶を好み球状ジャスミン茶は歓迎されず、普及しなかった[阮 2003a: (2)86]。

杭州市の茶葉販売量の 1971-1990 年にかけての推移をみると、1979 年に上昇しはじめたことは、中国全土や浙江省の統計と同傾向である。緑茶が主力を占めているであろうことは予測できたが、1990 年には紅茶が全体の約 2 割、花茶も全体の 4 割にも達している(表 6)。杭州では、自宅ではほとんど紅茶も花茶も飲用しない習慣から、いわば中国の他の地方や外国人向けの販売ではないかと推測されてくる。

(2)　1979 年に、浙江省特産品供給機関は、杭州市の銘茶(顧渚紫筍・泉岡煇白・天目青頂・香菇寮白毫・金奨恵明・華頂雲霧・温州黄湯)などの 18 の品種合計 247kg を、中国全土に供給した。

1982 年には省の茶葉機関がまたもや銘茶会議をひらき、質量ともにそろった銘茶の生産を欲求した。そのため茶葉会社にはまたもや銘茶(顧渚紫筍・泉岡煇白・東陽東白・天目青頂・径山香茗・金奨恵明)などの 21 品種数量 1944kg あまりがあつまった。1985 年には 1.69t、1990 年には 1.62t が集積されるようになった[阮 2003a: (2)78]。

6-3　注

(1)　中国においては、北京、上海、杭州など各地で、茶芸師培訓班が行われているが、現在日本でも 2003 年前後から、茶芸師養成培訓班が開講され始めている。

2004 年 2 月 28 日-3 月 7 日まで、東京においても高級茶芸師培訓班が開講され、全国各地から 32 名の受講生が集まった[周 2004: 6]。

(2)　茶芸師培訓班開設の動機については、以下のように指摘されている。

経済改革により、中国人の生活は日をおって豊かになった。結果旧式の茶館は少なくなり、新しい茶芸館が誕生した。しかし、そこではたらく茶芸師の訓練を行う場が少ない。日本・韓国のような系統的な教材・教師を、初級茶芸師・中級茶芸師・高級茶芸師養成の培訓班でもちいるべきである。

旧式の茶館が、貧困生活の中で生まれたものであるのに対し、茶芸館は、文化と芸術が結合したものであり、過去の中国文人が茶をあじわい、芸術品を鑑賞した生活を現代に伝えるもので、茶芸館に勤務するものは高い文化的素質が要求される。しかし、そこではたらく茶芸師の訓練を行う場が少ない。日本・韓国のような系統的な教材・教師を、初級茶芸師・中級茶芸師・高級茶芸師養成の培訓班でもちいるべきである。茶館とは、中国文化の伝統を現在に融合した形で人々にわから占める場であり、そこで働く人員も、茶にたいする総合的な理解をふくめた教育をおこなうべきである[阮 2002a: 4-5]。

6-4　注

(1)　日本や韓国も、経済発展をした結果、韓国の茶礼・日本の茶道は両方とも国際的に注目を集めるようになったのである。中国の茶文化は、あらゆる自然科学・人文科学の総合的なものである。中国の茶文化を高揚するためには、以下のような 8 つの対策が必要である。

①新しい茶学をつくりあげること。茶学とはひとつの実践的創造的な事業であるが、茶葉の品質・育種・保存・売買の面も視野に入れて、茶葉の社会的影響力の理論構築をすること。

②茶館・茶芸を今以上に発展させること。茶館・茶芸は、茶文化を具体的に目に見えるものにしたものである。少数民族をふくめて広い範囲の飲茶風俗を収集・整理し、特色ある現代の茶館・茶芸を創設しなければならない。茶の人にあたえる影響は、茶・茶器・周りの環境によって決まるものであり、茶をたて茶を味わうことはひとつの芸術活動である。ゆえに清く美しい環境を保たなければならない。優雅・清潔・静かな茶館こそが、友人とあったり、情報交換をしたり、商談する場所として最適である。

③茶園・茶の工場・茶の商店・茶館・茶葉会社を、それぞれ活性化させなければならない。

④観光を、発展させなければならない。魅力的な自然・文化遺産を、保護・活性化し、茶文化発展のために利用するべきである。観光客が「見て、聞いて、茶をとって、自分で加工して、味わって、購入する」ように仕向けることこそが、茶葉市場発展のための重要方式である。

⑤茶に関する人材を養成すること。各地の農学部茶学系・茶葉専門学校は、高い素質の人材の養成に努めるべきである。

⑥茶文化の宣伝をさらに推進するために、歌・舞踊・演劇・映画・書画などを利用するべきである。

⑦茶葉博覧会･検討会などを開催し､国際交流を拡大し世界市場を拡大すべきである。

⑧茶葉博物館を建設し、茶文化・知識を広めること[王 2002: 13-15]。

(2)　茶芸は、もともとひとつの総合芸術であり、優雅で美しい場所で茶芸を披露することによって、中国の茶文化の宣伝をすることができる。茶芸館の社会発展への良い影響とは以下のとおりである。

①茶芸館は、中国の茶文化の宣伝の窓口である。

②茶芸館は、中国の茶の歴史・産地・茶類区別・茶器の鑑賞・ティスティング・茶の保存などを、一般人への教育の場である。

③茶芸館は､茶芸を披露して､実践する場である｡中国の漢民族の茶芸だけではなく、

少数民族の茶芸をも、人々に紹介している。

④茶芸館は、国際文化交流の常設会場である。外国人は中国の茶芸館を訪れるのを好み、中国の茶芸館で、中国文化を経験することを喜ぶ。外国の有名人が来中するとき、かならず茶芸館を訪問する。茶芸館は、外国との民間交流にとって重要な位置を占めており、世界に向かって中華民族の伝統規範・礼儀を示し、国際理解を促進させることができる[童 1999: 61]。

(3) 韓国からの観光客は、1998 年 2900 人・1999 年 4 万 2800 人・2000 年 6 万 8100 人・2001 年 8 万 2600 人、2002 年は 15 万 8500 人

日本からの観光客は、1998 年 7 万 5500 人・1999 年 7 万 9200 人・2000 年 9 万 700 人・2001 年 9 万 9800 人、2002 年は 11 万 8800 人

ドイツからの観光客は、1998 年 1 万 1300 人・1999 年 1 万 2100 人・2000 年 1 万 6500 人・2001 年 1 万 7100 人、2002 年は 1 万 6900 人[杭州市旅游委員会 2002: 9]。

(4) 近年、杭州の茶館は雨後の竹の子のごとく、増加している。杭州市内のどんな街にも、あらゆる種類の茶館があるが、大部分は西湖の周辺にある。杭州の茶館は、現在 300 以上といわれ、また中国茶葉博物館・中国農業科学院茶葉研究所・中国国際茶文化研究会など、数多くの茶に関する団体が、杭州に拠点を置いている。杭州が茶の都といわれる理由は、杭州が典型的なレジャー都市であるからである。杭州の生活はゆったりとしたリズムで流れており、湖畔の美しい風景には、綺麗な若い女性が茶館を開くのにぴったりである。杭州に茶館が増加したのは、10 年前ほどのことであり、7・８年前に杭州の老舗の茶館は開かれたところが多い。それが 2000 年以降、新しい茶館が続々と誕生している[郭航 2003: 18-19]。

(5) 現在、杭州の茶館は 700 以上あるとされる[呉銘 2003: 64]。

杭州の茶館の基本分類は、以下の 5 つである。

①都市茶芸館：品質の良いインテリアを備えた、現代的ムードの茶館で、商談や社交の集りに適している。例としては、青藤茶館・国営の湖畔居茶館国営・個人経営であり古美術品が陳列されている和茶館・ 清朝末期から中華民国初期の時代の民俗文化に特色がある大極茶館・紫怡閣・西湖国際茶人村・インテリアが美しい藍宝などである。

②農家レジャー茶室：梅家塢(杭州郊外の有名な茶の生産地)の農家の茶室などが代表的であり、茶農家が自宅内に開設した茶室で、客は茶葉の加工を見学しながら茶をのんだり友人と会ったりすることができる。昼食や夕食も提供される。

③地域茶室：地域の自治組織が経営するもので、おもに老人が休息をとる老人クラブ

のようなものである。

④茶テーマパーク：2003 年秋に開園した竜井山園のように、いろいろな年代の茶の加工と茶芸を紹介する施設であり、客はこれらを見学しながら、茶を飲んでレジャーを楽しむことができる。

⑤ホテルやレストラン内部に開設された茶芸室：客に客同士があったり休んだり出来るようにする[阮 2003b: 私信]。

注　終章

(1)　清涼飲料の定義は以下のように規定されており、ペットボトルの茶類も含まれる。

「乳酸菌飲料、乳及び乳製品を除く酒精分１容量パーセント未満を含有する飲料をいうものであること。従って、酸味を有しない飲料水、主として児童を対象として製造されコルク等で簡単に栓を施した飲料水(例えばニッケ水、ハッカ水等)、トマトジュース、摂取時に希釈、融解等により飲み物として摂取することを目的としたもの(例えば、濃厚ジュース、凍結ジュース等）（ただし、粉末ジュースを除く。）もすべて含まれるものであること」（食品衛生法第５条別表第３の３号）

アルコールを含まない飲料、飲料水、鉱水、その他の飲料水(炭酸水を含む。)、清涼飲料、発泡性飲料、非発泡性飲料(うすめて飲用されるものを含む。)、果実飲料、天然果実、果実飲料、果肉飲料、果汁入り清涼飲料、果粒入り果実飲料、着香飲料、着香シロップ、牛乳又は乳製品から造られた酸性飲料、コーヒー飲料、茶系飲料、緑茶飲料、ウーロン茶、豆乳類、その他の非発泡性飲料、その他のアルコールを含まない飲料（以下略）[(社）全国清涼飲料工業会 2003: 1-2]

ここで基本資料として取り上げた、（社）全国清涼飲料工業会の調査対象者の属性は、以下の通りであり、同会の近藤雅雄監査役から提供を受けた。

①首都圏、近畿圏在住の 15-59 歳男女、計 904 名。
②実査会社の管理するインターネット調査モニターより抽出。
③ほぼ、男女・年齢層を均等に配分[（社）全国清涼飲料工業会 2003: 5]。

(2)　陰山坡谷者不堪採掇性凝滞結瘕疾
茶之為用味至寒為飲最宜精行俭徳之人
若熱渇凝悶脳疾目澁四肢煩百節不舒聊四五啜古與醍醐甘露抗衡也[陸羽 758: 巻上一之源１丁左-2 丁右]

陰になっている山や谷間に生得ている茶は、採取するに足る物ではなく、とどまりとどこおる性質があるので、瘕(しこり)の病気になってしまう。

茶はその効能を考えるに、本草学的にみて味は寒であるから、行いがすぐれ慎ましやかな徳をもつ人が飲むのに最も適している。

もし、発熱して喉が乾いているとき、気鬱になっているとき、頭や目が痛いときに、手足の関節がのびのびとしないときに、四五口茶をすすれば、醍醐や寒露に張り合える

ほど美味しい。

醍醐とは、古代の乳製品の一種で現代のチーズに近く、美味の例えにしばしば用いられた。

参考文献

アーリ(John Urry)

1990　『観光のまなざし』(加太宏邦訳), 法政大学出版局.

板倉聖哲

2004　「皇帝のまなざし　徽宗「瑞鶴図巻」をめぐって」『アジア遊学 64』,128-139.

孔憲楽

1993　『中外茶事』, 上海文化出版社.

伊藤ユキ子

1997　『紀行・お茶の時間』,晶文社.

井上範男

1990　「宋代茶業の専業化について」『史叢』44,41-52.

伊原弘

2003　『清明上河図をよむ』,勉誠出版.

内田道夫

1964　『北京風俗図譜(2)』,平凡社.

于永玉

1990　『読史基礎手冊』,吉林文史出版社.

于良子

2003　『翰墨茗香』,浙江撮影出版社.

梅原郁

1972　「宋代茶法の一考察」『史林』55-1,1-37.

栄西

1211　『喫茶養生記』,鎌倉・寿福寺本(1979,かまくら春秋社).

『喫茶養生記』,(楢林忠男訳 1971,平凡社).

『喫茶養生記』,(古田紹欽訳 2000,講談社).

王家揚

2002　「参観韓国茶文化教育活動有感」『茶博覧』30, 9-10.

王欽若

1013　『冊府元亀』,中華書局.

王建中

2004　『東北地区食生活史』,黒竜江人民出版社.

王仁湘

1993　『飲食与中国文化』,人民出版社.

王沢農

1988　『中国農業百科全書茶業巻』,農業出版社.
王天璽
2002　「弘揚茶文化八策」『茶博覧』30, 13-15.
王鎮恒
2000　『中国名茶志』,中国農業出版社.
王玲
1992　『中国茶文化』,中国書店.
欧陽脩
1060　『新唐書』食貨志一.
太田好信
1993　「文化の客体化――観光をとおした文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57(4), 383-410.
賈蕙萱
2000　『食を持って天となす』,平凡社.
郭航
2003　「杭城茶館素描」『茶葉信息』71(6), 18-19.
郭孟良
2003　『中国茶史』,山西古籍出版社.
河北省文物研究所
2000　『河北古代墓葬壁画』,文物出版社.
2001a　『宣化遼墓壁画』,文物出版社.
2001b　『宣化遼墓』(上),文物出版社.
2001c　『宣化遼墓』(下),文物出版社.
2004　私信.
神田信夫
1989　『中国史籍解題辞典』,燎原書店.
韓敏
1996　「中国観光のフロンティア――創出される「地域文化」」『観光人類学』(山下晋司編): 新曜社, 169-177.
吉兆豊
1984　『古今茶具図』, 常春樹書坊.
90’S 中華生活ウォッチャーズ
1997　『踊る中国人』,メディアファクトリー.
巩志
2003　『中国貢茶』,浙江撮影出版社.

暁然
2001 「茶飲料與青春做伴」『中国煙酒茶』7, 82.
工藤佳治
2000 『中国茶図鑑』,文藝春秋社.
クライトナー(Gustav Kreitner)
1992 『東洋紀行』(小谷裕幸・森田明訳), 平凡社.
蔵持不三也
1988 『ワインの民族誌』, 筑摩書房.
倪士毅
2000 『古代杭州』, 西玲印社.
闕維民
2000 『杭州城池暨西湖歴史図説』,浙江人民出版社.
阮浩耕
1990 『竜井茶及其它』,浙江撮影出版社.
2001 『茶之初四種茶之文史百題』,浙江撮影出版社.
2002a 「為中国茶芸教育的興起歓呼」『茶博覧』30, 4-5.
2002b 『中国茶芸』, 山東科学技術出版社.
2003a 『浙江省茶葉誌』, 2003 年現在未出版.
2003b 私信
孔憲楽
1993 『中外茶事』, 上海文化出版社.
『杭州市地図集』編集部
2004 『杭州市地図集』,中国地図出版社.
杭州市統計局
2004 『杭州統計年鑑』, 中国統計出版社.
杭州市旅游委員会
2002 『杭州旅游概覧』, 杭州市旅游局.
2003 『泡杭州』, 浙江撮影出版社.
江万緒
2002 「“華韵”：茶芸師的揺籃」『茶博覧』30, 11-12.
呉旭霞
1999 『茶館閑情』, 光明日報出版社.
呉敬梓
18 世紀 『儒林外史』
呉光栄

2004　『茶具珍賞』,浙江撮影出版社.
呉自牧
1147　『夢粱録』浙江人民出版社,1980.
小長谷有紀
1996　「モンゴルにおける観光立国――観光装置と異文化理解」『観光の二〇世紀』二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容(石森秀三編): ドメス出版, 123-138.
呉理人
2002　『銭塘里巷風情』,杭州出版社,38-39.
蔡襄
1064　『茶録』.
蔡泉宝
2000　「≪中国茶館」的聯想」『陸羽茶文化研究』10, 112.
齊藤美和子
1997　「茶館与茶芸館的功能問題」『陸羽茶文化研究』7,27.
1998　「中国の伝統的喫茶施設」『茶館』がコミュニティ形成に果たす役割の分析」『食生活科学・文化及び地球科学環境科学に関する研究助成研究紀要』14,1988,79-86.
佐伯富
1977　『中国史研究第３』,同朋社.
1990　『王安石』,中央公論社.
佐々木正哉
1970　『清末の秘密結社、前篇』,厳南堂書店.
宍戸佳織
1996　「明代開中法の研究――在司納銀制と馬文升」, 早稲田大学大学院文学研究科史学(東洋史)専攻修士論文.
2002　「中国の茶館文化　――北京の茶館と茶芸館――」『ヒューマンサイエンス　リサーチ』11, 69-87.
2003　「浙江省中国茶葉博物館における、高級茶芸師培訓班に参加して」『史滴』25, 100-113.
島尾伸三
2001　『中国庶民生活図引[癒]』,弘文堂.
島田正郎
1952　『遼代社会史研究』,三和書房.
(社)全国清涼飲料工業会
2003　『平成 14 年度 清涼飲料総合調査「基本調査」等による時系列分析』,

(社)全国清涼飲料工業会,
2005a 『清涼飲料関係統計資料』,(社)全国清涼飲料工業会.
2005b 監査役近藤雅雄氏提供資料.
上海市茶葉学会
2003 「信息与動態」『茶報』82, 48.
周智修
2004 「中国茶葉学会在日挙行茶芸師培訓」『茶葉信息』95, 6.
朱自振
1995 『中国茶酒文化史』,文津出版.
朱世英
2002 『中国茶文化大辞典』,漢語大詞典出版社.
シュリーマン(Heinrich Schiliemann)
1991 『シュリーマン旅行記』(石井和子訳), 講談社.
笑々生
1600 年頃 『金瓶梅』(小野忍訳),平凡社.
施耐庵
14 世紀 『水滸伝』(吉川幸次郎訳),岩波書店.
徐海栄
2000 『中国飲食史巻 4』,華夏出版社.
審案老人
1269 『茶具図賛』,1987,汲古書院.
沈冬梅
1999 『宋代茶文化』,学海出版社.
2004 私信.
沈甫翰
1998 「日常生活の中の茶道」, 2003 年 8 月著者贈呈.
2003 私信.
石泠
2002 『歴代人物画経典白描墓本』,世界華人芸術出版社.
施海根
1994 『中国名茶図譜』,上海文化出版社.
施奠東
1999 『品茶説茶』,浙江人民美術出版社.
浙江省旅游局
1999 『浙江省国内旅游抽様調査資料』, 浙江省旅游局.

2000　『浙江省国内旅游抽様調査資料』, 浙江省旅游局.
浙江大学茶学系
2002　『中華茶文化』,浙江大学農学部茶学系.
浙江文物考古所
1986　『浙江文物簡志』,浙江人民出版社.
セロー(Paul Theroux)
1988　『中国鉄道大旅行』(中野恵津子訳), 文藝春秋社.
蘇祝成
2003　『中国茶産業』,浙江人民出版社.
宋子安
1048 年以後(年代不明)　『東渓試茶録』.
宋綬
南宋年間出版　『宋会要』,(佐伯富 : 宋代茶法研究資料,東方文化研究所,1941.87-92 所載).
孫洪升
2001　『唐宋茶業経済』,社会科学文献出版社.
曹士才
2001　「中国における民族観光の創出　――貴州省の事例から――」『民族学研究』66(1), 87-105.
楚啓恩
2002　『中国壁画史』,浙江大学出版社.
高橋忠彦
1989　「唐宋を中心とした飲茶法の変遷について」,東洋文化研究所紀要, 109,243-272.
1996　「『茶録、茶具図賛』の国字解について(下)」,学芸国語研究, 28,123-131.
2000a　「中国茶文化研究の歴史と諸問題」『茶道学大系第 7 巻　東洋の茶』(千宗室監修): 淡交社, 5-22.
2000b　「宋の点茶文化をめぐって」『茶道学大系第 7 巻　東洋の茶』(千宗室監修): 淡交社, 53-80.
2001　「喫茶の風景」『アジア遊学』,31,95-107.
2004　「中国の文献に見える茶の水色」,『茶の湯文化学会会報』, 41,4.
ダ・クルス(Gaspar Da Cruz)
1570　『中国誌』(日埜博司訳), 講談社.
脱脱
1345　『宋史』.
棚橋篁峰
2003　『中国茶文化』, 紫翠会出版.

谷本陽蔵
1990　『中国茶の魅力』,柴田書店.
1992　『お茶のある暮らし』,草思社、
ダヴィッド=ネール(Alexandra David-Neel)
1927　『パリジェンヌのラサ旅行』(中谷真理訳),平凡社.
田村実造
1964　『中国征服王朝の研究』(上),東洋史研究会.
中華人民共和国職業分類大典和職業資格工作委員会
1999　『中華人民共和国職業分類大典』, 中国労働社会保障出版社.
中華人民共和国国家旅游局
2003　『中国旅游年鑑』, 中国旅游出版社
中国国際茶文化研究会
2002　「各地紛紛挙瓣茶芸師的培訓班」『茶博覧』30, 6-7.
中国茶葉股份有限公司
2001　『中華茶葉五千年』, 人民出版社.
中国茶葉進出口公司
1997　『中国茶葉出口統計彙編』, 中国茶葉出口統計彙編編集委員会内部資料.
中国茶葉流通協会
2003　「我国茶業経済的十年新変化」『茶葉信息』67(2), 4-5.
趙佶
1107　『大観茶論』説郛本.
張舜民
1100 年前後　『画漫録』.
趙汝礪
南宋年間　『北苑別録』.
陳浩行
1999　『中国歴史文化名城――杭州』,杭州出版社.
陳琿
2000　『中華茶文化尋捜』,中国城市出版社.
陳淑美
1998　「新たに広がる中国茶の世界――茶の故郷は台湾に」『光華』23(10),97.
陳新華
1994　『中国――茶的故郷』,香港文化教育出版社.
陳椽
1984　『茶業通史』,農業出版社.

1985　『製茶学』,中国農業出版社.
陳文華
1999　『中国茶文化基礎知識』,中国農業出版社.
角山栄
1980　『茶の世界史』,中央公論社.
鄭紹宗
出版年不明　「宣化遼墓壁画茶道図的研究」『芸文論叢』30-51,2004 年 8 月著者贈呈.
2004　私信.
陶徳臣
2001　「中国茶業経済史研究総述」,『農業考古　中国茶文化専号』,22,245-258.
2002　「中国茶業経済史研究総述(続)」,『農業考古　中国茶文化専号』,23,258-270.
東君(騰軍)
1998　『茶から茶道へ』, 市井社.
董尚勝
2002　『茶史』,浙江大学出版社.
童啓慶
1979　「茶樹栽培学」,農業出版社.
1999　「茶芸館興起及其対社会発展的影響」『農業考古 中国茶文化専号』17, 61.
唐徳臣
2001　「唐宋飲茶風習的発展」『農業考古　茶文化専号』21,256-259.
中地敬
1998　「飲茶による癌の予防(基礎研究から臨床応用へ)」『メディカル朝日』27(2),74-79.
中村喬
2000　『宋代の料理と食品』,朋友書店.
中山時子
1988　『中国食文化事典』,角川書店.
布目潮渢
1976　『中国の茶書』, 平凡社.
1987　『中国茶書全集』,汲古書院.
1995　『中国喫茶文化史』,岩波書店.
1998　『中国茶文化と日本』, 汲古書院.
2001a　『中国茶の文化史　固形茶から葉茶へ』,研文出版.
2001b　『茶経詳解』,淡交社.
橋本和也
1999　『観光人類学の戦略』, 世界思想社.

橋本実
1981　「茶樹の起源」『茶の文化　その総合的研究　第一部』(守屋毅編集): 淡交社,19-31.
平野久美子
1999　『中国茶・アジアの誘惑』,文藝春秋.
武夷岩茶節組織委員会編
1990　『武夷奇名』,海潮撮影芸術出版社.（高畑常信訳）1999「朱子学と武夷山の岩茶」『東京学芸大学紀要第 2 部門人文科学』50,417-472.
藤原冬嗣
840　『日本後記』,(佐伯有義 : 増補六国史巻 5(日本後記上巻,朝日新聞社,1940.209-210 所載).
古林森広
1987　『宋代産業経済史研究』,国書刊行会.
1995　『中国宋代の社会と経済』,国書刊行会.
北京市統計局
2001　『北京統計年鑑 2001』,中国統計出版社.
封演
742-805 年前後　「飲茶」『封氏聞見記』巻 6,1 丁右-2 丁左,(紀昀(1724-1805) : 四庫全書子部雑家類.)
方健
2000　「宋茶書考」,『宋歴史文化研究』(張其凡主編): 人民出版社,391-409.
星斌夫
1966　『中国社会経済史語彙(正編)』,東洋文庫近代中国研究センター.
1988　『中国社会経済史語彙(三編)』,光文堂書店.
ポーロ(Marco Polo)
1298　『東方見聞録』(愛宕松男訳), 平凡社.
マッカートニー(George Macartney)
1793-1794　『中国訪問使節日記』(坂野正高訳), 平凡社.
松下智
1986　『中国の茶　その種類と特性』,河原書店.
1988　『中国名茶の旅』,淡交社.
宮尾しげを
1939　『支那街頭風俗集』,実業之日本社.
水野正明
1983　「宋代における茶の生産について」『待兼山論叢』, 17,25-51.

1985　「宋代における喫茶の普及について」『宋代の社会と宗教』(宋代史研究会編):汲古書院.193-224.
村井康彦
1979 『茶の文化史』,岩波書店.
村松敬一郎
2002 『茶の機能(生体機能の新たな可能性』,学会出版センター.
孟元老
1147　『東京夢華録』(入矢義高訳),岩波書店.
手代木公助
1995　『北京の老百姓』,田畑書店.
守屋毅
1992　『喫茶の文明史』,淡交社.
柳本修
1980 『日本まんが賞事典』,るいべ社.
山西貞
1992　『お茶の科学』,裳華房.
熊蕃
1182　『宣和北苑貢茶録』.
姚偉鈞
1999　『中国伝統飲食礼俗』,華中師範大学出版社.
楊渭生
1998　『両宋文化史研究』, 浙江大学出版社.
楊暁絹
2001　『華夏之旅　北京』,旅遊教育出版社、
姚國坤
1991　『中国茶文化』,上海文化出版社.
2004　『中国茶文化遺迹』, 上海文化出版社.
姚敏蘇
2002　「北京石景山金墓新出土点茶図壁画解析」『農業考古　茶文化専号』23,146-149.
余悦
1999　『茶路歴程』, 光明日報出版社.
余彦焱
2001　『中国歴代茶具』, 浙江撮影出版社.
横井淳平(豊茗会)
2004　私信.

羅信耀
1988　『北京風俗大全』(藤井省三訳), 平凡社.
陸羽
758　『茶経』.
陸尭
2001　「新世紀中国茶変変変！」『中国煙酒茶』7,7-8.
陸松侯
2000　『茶葉審評与検験』,中国農業出版社.
劉勤晋
2004　「中国唐宋時代の製茶方法及びその変遷」,『茶の湯文化学会会報』,41,4-5.
劉修明
1995　『中国古代的飲茶与茶館』,商務印書館.(高畑常信訳）2001「中国の茶館と飲茶」『東京学芸大学紀要第 2 部門人文科学』52,147―180.
劉昭瑞
2002　『中国古代飲茶芸術』,陝西人民出版社.
呂毅
2002　「不思議な茶“黒茶”のすべて～黒茶の生い立ち」,『FOOD Style 21』6(4),106.
寥宝秀
1996　『宋代喫茶法与茶器之研究』, 国立故宮博物館.
林正秋
1996　『浙江歴史与旅游文化』, 中国国際広播出版社.
ル・ジャンドル(Charles William Le Gendre)
19 世紀　『ル・ジャンドル台湾紀行』. (我部政男・栗原純編）「李氏台湾紀行」,緑蔭書房 1998　(原文より、現代語表記に訂正).
『歴史文化名城杭州』編委会
2000　『歴史文化名城杭州』,浙江人民出版社.
路遇
2000　『中国人口通史』(上),山東人民出版社.
和田清
1960　『宋史食貨志訳註』(一) ,東洋文庫.